



栽培を成功させ、若い世代を呼び込みたいと意気込む。



オリーブの可能性を信じて成功を誓う

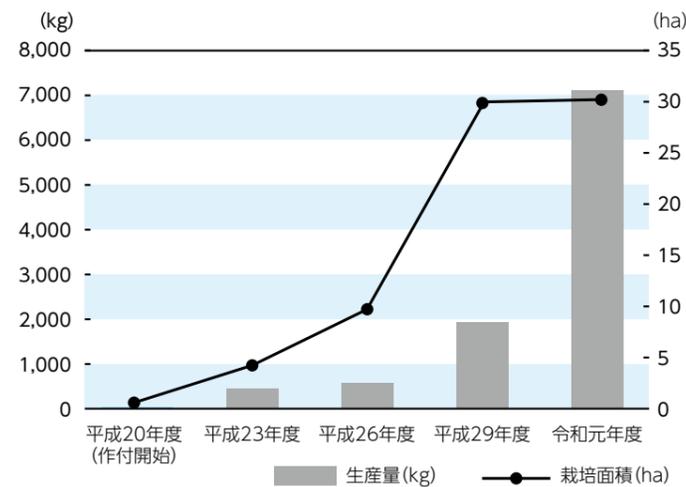
岐部 征夫 さん (国見町櫛来)

30数年前に帰郷した岐部さんは、ふるさとのみかん園が荒廃していく姿を目の当たりにしていた。「荒廃園を再生させるために、地元の仲間とオリーブに注目したんだ。産地も少なく、国産は数パーセント。これは見込みがあるぞって」。関係者と協議を重ね、市のオリーブ本格導入が始まった。

農協のオリーブ部会が発足すると、副会長に就任。10年にわたって、副会長として部会の発展を模索し続けた。「これまで大変だったけど、オリーブの可能性を信じてついてきてくれた部会員には感謝しかないね」。

岐部さんは、オリーブ栽培の「成功」にこだわっている。一緒に頑張ってきた部会員に報いるため、そして、次の世代に引き継ぐためだ。「必ず栽培を成功させて、オリーブで食べていけることを若者に示したい」。立派に成長したオリーブの木を見上げて、目を細めた。

国東産オリーブの生産量と栽培面積の推移



法人の新規参入が追い風となり、生産量、栽培面積ともに当初より大きく増加。市は、将来的に栽培面積50haを目標にしている。



オリーブ栽培の達人は「諦めない男」

西川 健一郎 さん (国見町竹田津)

「国東半島でのオリーブ栽培は実績がないから、不明なことが多い。枯れたり、実がならなかったりしても対策がわからなかった。10数年経っても、まだ色々試しながらやっている」。元農協職員で、実家ははっさく農家だった西川さん。農業経験は豊富だったが、オリーブ栽培はいまだに困難が多いという。

それでも市内のオリーブ農家の間では、西川さんのオリーブは毎年多くの実をつけることで有名だ。人一倍熱心に研究をする西川さんは、誰もが認める「オリーブ栽培の達人」なのだ。「外国や小豆島と同じ栽培方法ではだめ。国東に合ったやり方を見つけたい。それが少しずつわかってきたけど、まだ試行錯誤が必要かな」。

そんな西川さんを、地元の高校生は調べ学習でこう表現した一諦めない男。73歳、諦めない男の挑戦は、これからも続く。



弱った木を伐採し、新芽を生やして木を再生する実験を始めた。

福岡県出身の丸小野さんは、種苗会社を退職し、祖父母のみかん園を継ぐ形で今年3月に就農した。「農業は独学ですが、前職の知識が役立っています。みかんを軸に、オリーブやベブリーフの栽培に挑戦していきたい」と、意欲を語ってくれた。

福岡にも国東オリーブの名は届いており、ずっと興味を抱いていたという。「国産需要が高いオリーブには将来性があると思いました。就農と同時に市の補助制度を活用して、苗木を400本植えました。軌道に乗れば、3,000本まで増やしたいと考えています」。

丸小野さんの将来の目標は、農業法人を立ち上げることだ。「いずれは農業法人にして、生産・加工・流通までを一体的に行う6次産業化に取り組みたいですね」。そう言って優しくオリーブをなでる姿は、天国の祖父母に語りかけているように見えた。

祖父母が開拓した農園で夢を描く

丸小野 英文 さん (安岐町大添)



叔父叔母と協力して、祖父母のみかん園を継承。